平成27年　1月29日　城南新報

太田国交大臣へ直接要望

新名神スマートIC、防災拠点

城陽市の奥田市長「宇治木津線」整備も

太田国交大臣に要望書を手渡す奥田市長ら（国交省大臣室）

城陽市の奥田敏晴市長は27日、東京・千代田区霞が関にある国交省に太田昭宏大臣を訪ね、2023年度完成を目指して全線着工された新名神高速道路の開通に合わせた「府南部地域の活性化」「市東部丘陵地の整備促進」に向けた要望を行った。

昨年8月、新名神高速道路建設促進議員連盟の国会議員らが同市の山砂利採取地内を視察した際、そのメンバーである竹内譲衆院議員（公明・近畿ブロック）から大臣要望の話が提案されたことがきっかけとなった。この日は、京都選出の西田昌司参院議員（自民）をはじめ藤城光雄市議会議長、熊谷佐和美・増田貴・乾秀子各市議（いずれも公明）、府・市の幹部職員も同席する中、国交省大臣室での直接要望が実現した。

具体的な要望内容は、新名神の一日も早い全線整備はもちろん、市東部丘陵地整備計画の促進に大きく寄与する「スマートインターチェンジ」の整備。国道24号山城大橋以南ルートが木津川堤防上を走り、洪水により崩れると府南部の重要路線が寸断されるとして、そのバイパス機能を果たす木津川右岸の学研都市（木津川市）と城陽市東部丘陵地を結ぶ「宇治木津線」の整備も強く求めた。

また、ほぼ埋戻しのメドがつき、来年度中の市街化編入を目指す「長池（28㌶）」「青谷（27㌶）」の先行整備地区の間に位置する新名神ルート南側に広がる「中間エリア」についても、近畿の中心地という地理的優位性を生かした『基幹的広域防災拠点』などを国家プロジェクトで整備してもらうよう求めた。

いずれも広大な山砂利採取地再生につながる重要施策ばかりで、これら要望に対し、太田大臣からは「大事な（地域である）ことはよく分かりました」と前向きな回答があったという。